

また、この人の本を読んでしまった！ という感じ。でも、9月29日から韓国へ行く前にこの本を読んでよかった！と思う。

いつも、一気に読みだけど、この人の作品は心にずしりと響いく感動がある。

この人の作品はどこまでがノンフィクションで何処あたりがフィクションなのか気になるところです。ネットの感想ではフィクションだから・・・と書かれているものもあったが、私は、これを全くフィクションとして読むことはできない。多分、ベースは史実でいくつかの実話を組み合わせてストーリーにしているのかもしれないと思う。

作者がどこかで日本人として書いておかねばならないという思いで書いたとありますが、日本人として読むべき本だとおもった。

私が勤め始めた頃、子どもの保護者の中に炭鉱離職者がいたことを思い出す。炭鉱のストライキや落盤事故もわりと知っていた。しかし、この事実には胸が塞がれて思いだった。また、終戦末期200万人もの韓国人がいたというのも驚きである。また、15年戦争だけでなく、織田信長の時代から日本が韓国を蹂躪してきたことも改めて感じた。

日本に韓国蔑視があり、韓国に反日感情が・・・長い友好の歴史もあり、隣国なのにどうしてこんなにいがみ合っているのかと思う。お互いの損にこそなれ得にはならないと思う。

いつも、重たい帯木の作品だけど、ちょっとラブストーリーもあり、50年ぶりの親子の対面やいくつかの場面で目頭がジーンときた。でも、最後の遺言は、いらないと思った。しかし、それほど許せぬ怨念や怒りがあつたと取るべきなのか？？あまり強烈な終わり方で少々、ビックリした。

また、今まで読んだ本と書き方が違っていて、現在と過去（追憶）が交互に出てくる書き方も面白いと思った。

